

## 書 評

### 三木一彦著『三峰信仰の展開と地域的基盤』

古今書院 2010年 225p. 4600円(税別)

本書は、著者が2007年度に筑波大学に提出した博士学位請求論文「近世中・後期における三峰信仰の展開とその地域的基盤」に、その後加筆して一書にまとめられたものである。

本書を読み終わっての感想を一言で言えば、「文献や史料をよく調べてあるのだが、パンチ力がない」ということであつた。一般に(誤った主張も含めて)個性的な議論は、読者に強いインパクトを与え、賛否や好悪を呼び起こす。しかし、本書は「すごい」とか「無茶だ」というインパクトをあまり感じられず(それは、評者が初出論文をすべて読んだことがあるのも一因であろうが)、盛り上がりがないうちに何となく読み終わってしまった。そういう点からすると、実は本書は書評を書きにくい本なのであるが、山岳信仰を扱った博士論文として、宗教地理学の研究史上、やはり重要な著作であることは間違いないのであり、以下、再読しながら紹介と拙評を記したい。

第1章「序論」は3つの節からなり、第1節では、宗教地理学の主な研究対象について、歴史地理学的研究を概観する。そして、残された課題の1つとして、信仰圏研究において空間的な構造や形状ばかりに関心が集中し、なぜそのような信仰圏が成立しているのかという問題をあまり考慮してこなかった点を挙げる。著者はまた、現実の信仰圏はより複雑であり、地域をより限定した検討の蓄積が求められるとも述べる。後段は、第Ⅲ章以降、事例地域の詳細な調査がなされることに対応している。もう1つの課題として、著者は、地域においてどのような要因のもとで信仰対象が受容されたかという研究が少ないことを挙げる。また、信仰対象の重層性を組上に載せることの必要性も言う。本節での課題の書き方は分かりにくい、後出の簡明な表現を使えば、「信仰圏の形成

過程」と「地域における信仰のありかた」(16頁)であろう。

第2節では、本書の目的が「三峰信仰の展開を、それを受け入れた地域の状況をふまえながら明らかにすること」(6頁)と明言される。本書のタイトル「三峰信仰の展開と地域的基盤」は、このことを明確に示している。そして、時代として、江戸時代、とりわけ18世紀以降に焦点をあてると述べられる。学位請求論文のタイトルに「近世中・後期における」とあるとおりである。その後、江戸時代の宗教や寺社参詣の特色について、先学の見解を紹介する。

第3節では、三峰信仰の研究史を記した後、本書の研究方法について、信仰は地域の中の一事象であり、信仰の展開を考えるうえでは、信仰を受け入れた地域における経済・社会の動向や、当該地域と他地域との地域間交流といった信仰以外の面も考慮する必要があると強調する。また、信仰の展開を地域的基盤との関連でみるとも述べる(「地域的基盤」の語の初出)。そして、江戸地廻り経済圏が、関東地方において、三峰信仰など地方的霊山への信仰が展開する地域的基盤として重要であったと指摘し、最後に史資料の簡単な説明がある。

第Ⅱ章「三峰山と三峰参詣」は江戸時代における三峰信仰の概要を述べ、第Ⅲ～Ⅵ章では、秩父地域・関東平野・江戸という地域ごとの三峰信仰の展開について考察される。

第Ⅱ章の前半は、三峰山の近世末までの歴史を概説する。相模大山や榛名山と比べて歴史が新しく(16世紀中期以降)、配下修験の範囲が狭いこと、御師による門前集落が存在せず、参詣者は山上の宿坊に宿泊したことなどが述べられる。後半では、三峰参詣について、18世紀中期から参詣

者数が増加し、19世紀前期から中期にかけて急増したこと、19世紀中期の信仰圏が関東甲信地方に広がっていたこと、また、2つの参詣記録を例に、参詣者を三峰山が厚遇したこと、三峰参詣と秩父巡礼が結びついていたこと、猪鹿除け・火防・盗賊除け等さまざまなご利益が祈願されていたことなどが記される。

第三章「三峰山の基盤確立と大滝村」は、三峰信仰が展開した地域のうち、お膝元の大滝村を取り上げる。17世紀中期以降、木材生産・流通が進展するなかで、三峰山麓の大滝村には、村として結束し、山林に関する権利を主張する必要が生じてきた。そこで、大滝村全体のまとまりの象徴としての地位、鎮守としての役割が三峰山に付与されたと主張する。

本章の議論は、ありうる話だろうとは思いますが、納得しきれない面が残る。その理由は、鎮守としての役割を三峰山に付与したという史料がずいぶん後の幕末のもので、しかも文言がそのようには解釈しがたく（史料中の「鎮守」とは大滝村の鎮守ではなく、寺院でもある三峰山の鎮守であり、その鎮守である山神を三峰明神として山内に勧請し祠を建てたと解釈できる）、明確な裏付けになっていないこと、村の鎮守としての意味を持った年中行事が提示されていないこと（年始の登山は山麓の3集落のみである）など、三峰山と村としての大滝村との関係を具体的に示す資料が欠けている点にある。もちろん、19世紀初めの勸化帳に見られるように、三峰山と大滝村役人に関わりがあったことは事実であろうが、この勸化帳に村役人全員の名が記載されているのかどうかは不明である。また、18世紀前期に山内に末社を勧請した時の施主の在所は大半が大滝村内というが、むしろ大滝村の範囲と一致しないことが問題であろう。大滝村内でも、施主10件は、1件を除いて、すべて距離的に近い古大滝村の集落であり、これで大滝村全体のまとまりの象徴ということが言えるのか疑問である。ないものねだりになるが、社会的・経済的側面のうち、村落社会の検討がほとんどなされていないのも不満が残る。村としての

結束を主張するのであれば、村落共同体的性格を示す最低限のデータはほしい。本書の記述では、各集落や組、古・新大滝村、大滝村それぞれのレベルでの共同体的状況があまりにも不分明である。たとえば、集落別戸数という基本的データさえないし、木材生産に集落や組あるいは村がどのように関与したのかも不明である。元禄6年に区分された「百姓稼山」を著者は共有地と考えているようだが、集落・組・村のどのレベルの共有地なのかも分からない（注8の安政7年の文書では組単位のようなものである）。また、もともと一村だった大滝村（郷？）が17世紀中期に分村した（21頁）というのに、17世紀後期に大滝村の村としてのまとまりが生まれてきたというのは論理的に不自然で何らかの説明が必要であろう。以上のように、三峰山を地元の大滝村の住人が支えていたことは認めるとしても、それが「村として」かどうかについては、著者の主張が立証されているとはいえない。

第四章「秩父地域における諸信仰対象と三峰山」では、秩父地域における三峰信仰の性格について検討される。前半は、三峰山配下の修験の檀廻記録や大滝村の年中行事記録などによって、三峰信仰が多くの信仰対象の1つとして受け入れられていたこと、また大滝村の場合は付き合いの面もあったことを述べる。ただし、これは日本の村落ならばどこでも予想される事柄で、目新しさはない。後半は、秩父郡大野村を取り上げ、18世紀中期以降は多種多様な信仰集団が存在していたこと、その背景として御用炭など林産物の生産が活発化し、村外との交流も盛んになっていたこと、村内秩序も変動していたことなど、経済的・社会的状況との関わりを述べる。19世紀前半の史料が初見の三峰講に関しては、御用炭生産における大野村と大滝村との交流を指摘する。

本章後半では、信仰集団と経済・社会との関わりが強調されるが、一般論としてはありうると思えても、事例に即して納得がいくものではない。すなわち、本章では、両者をつなぐ具体的な事例や資料が提示されていないのである。御用炭の生

産や村外交流、身分秩序の変化が信仰集団の設立や活動とどのように関わったのかが具体的に示されていないため、関係のありそうな同時代の事象を並べて、片方がもう片方の背景になっていると主張しているにすぎない。また、榛名講は構成員が平等で、一般の村人の地位向上と関連すると述べるが、古くからの講は平等ではなかったのかと、榛名講だけが平等だとすれば、なぜ榛名講だけなのかという疑問に答えなければ説得力がないであろう。

第V章「関東平野における三峰信仰」ではまず、関東平野村落部における三峰山への願意として、18世紀中期には猪鹿除けが中心であったが、年代が下るにつれ、都市部での火防・盗賊除けの願意が村落部へ伝わったとする。後段の前書きのような軽い書き方だが、実は、信仰圏の形成過程という上述の第一の課題に対応する重要な内容である。しかし、願意の年代と地点を示す資料がきちんと整理されず、提示されているデータ数もわずかであるため、著者の推論が成り立つのか不安を感じざるをえない。たとえば、寛政11年に三峰山の地元の新大滝村から火防の相談が来ている史料(79頁)を見ると、早い時期から村落部でも火防のご利益が期待されていたのではないかと考えられるし、弘化3年に三峰山が火災消除の木札を秩父郡中の村々に配っている史料(79頁)からは、三峰山自身が火防のご利益を広めているようにも解釈できる。前半の最後には、三峰信仰が関東平野へ展開した18世紀後期～19世紀前期に貨幣経済が村落部に浸透していたという社会的状況に触れられるが、第IV章と同じく、同時代の現象の併記にすぎず、因果関係が論証されているわけではない。

後半は、三峰信仰がとくに盛んであった武蔵国東部を取り上げ、19世紀前期には三峰信仰が広まっていたことが述べられる。そして、日光道中の宿場町である杉戸宿・千住宿とその周辺の三峰信仰について詳述される。とくに三峰講の組織形態が、大山講や榛名講に比べると、村民の一部加入という点で村落的性格が希薄だが、富士講に比

べると地縁的で、村を地縁によって結びつける力を持っていたとする。著者は本章では、三峰講と地縁との関わりにこだわりを見せ、それは確かに地理学的視点なのだが、そうであるならば、日本の村落社会地理学の厚い研究蓄積<sup>1)</sup>を踏まえて考察されるべきものと思う(これは第三章にも当てはまる)。村落は、生産の場であるとともに生活の場でもあり、その地域的まとまりは、生産・生活の両面から検討されるべきである。本章では、鎮守や檀那寺には少し触れられているものの、その他の生活面や生業面での村落結合の考察を欠いている。それが不明のまま、講の地縁的意義を議論することはできないであろう。近世を対象とする点で資料的制約があることは分かるが、「地域的基盤」と言いながら、地域の一面しか見ていないように思える。

第VI章「江戸における浸透とその社会的背景」では、三峰信仰の大きな基盤であった江戸を取り上げる。前半では、18世紀後期以降、火防・盗賊除けのご利益として江戸で三峰信仰が受け入れられたこと、三峰山の江戸檀廻や江戸の講から三峰山への奉納も18世紀後期には始まっていたこと、江戸以外の地域へ三峰信仰が伝わる中継地の役割を江戸が果たしていたこと、講は地縁に基づくものが一般的だが、職縁に基づく講も結成されていたことなどが述べられる。後半では、材木問屋を中心にして組織された堅川講に焦点をあてる。堅川講は、江戸の三峰講の中でも最も三峰山とつながりの深い講で、多くの奉納をし、講頭が三峰山の江戸出張所の機能を果たしていたことが紹介される。そして、19世紀に入って、緩みがちな問屋仲間の結束を保つため、講組織の必要性が増し、三峰山への参詣や奉納を通じて、講や問屋仲間のまとまりを再生産していたとする。最後に、材木問屋が火事で利益を得ることの「免罪符」としての役割が、三峰山への火防の願意に求められていたと指摘する。

この章の後半も、素直にうなずくのがためらわれる。著者は、緩みがちであった問屋仲間の結束を保つために講組織が必要だったというが、問屋

仲間の結束が深刻な問題になっていけば、そんなことをしている余裕はないはずである。逆に言えば、問屋仲間がある程度まとまっているからこそ、講の活動が可能になるのではなからうか。講に紐帯の再生産の機能があることは否定しないが、あまり過大評価するのもどうかと考える。また、火防に「免罪符」としての役割が求められていたという主張は面白いアイデアなのだが、これも直接的な資料がない以上は、何とも言えない。いくら火事でもうかるといっても、材木問屋も火事はいやだったので、三峰山に火防のご利益を願ったという正反対の解釈もありうるはずである（表面的かもしれないが、資料的にはこちらである）。著者の深読みが当を得ているかどうかは、きちんとした資料が示されなにかぎり、面白いアイデアのままにとどまるであろう。

第七章「結論」では、第Ⅱ～Ⅵ章の内容の要約をした後、本書による知見が3項目にわたってまとめられる。第一の「信仰圏のありよう」においては、第1章で挙げられた課題のうち信仰圏の形成過程について、信仰圏の空間構造が非常に複雑であり、空間上、不連続的に信仰が受け入れられた、また時期によって信仰圏の構造に相当な差異があると述べられる。これらの表現は、（とくに地理学者が）ここの部分だけを読めば、複雑な構造の信仰圏の地図が時期別に本書に提示されているのかと誤解してしまうだろう。しかし本書には、19世紀中期の三峰信仰の広がりを示す地図（37頁の図2-6）はあるものの、その空間構造が分かる図はない。上に紹介してきたように、著者は、面的に広範囲にデータを収集するよりも、大滝村や大野村、杉戸宿、千住宿、江戸などいくつかの地点で詳細な調査を行なうことに関心の中心があり、信仰圏の空間構造を図示できるようなデータはないのである。著者は、17～19世紀の関東平野や江戸などにおける三峰信仰の展開過程をここでおおまかに述べるが、信仰圏云々よりも、こちらが知見とすべきであろう。ただし、それは空間的には厳密な議論ではなく、時間的にもあまり厳密ではない。ついでに言うならば、三峰信仰の

展開過程に関する著者のラフスケッチを信仰圏の研究史にのせるのはあまりうまくないと評者は考える。三峰山の信仰圏はどのような空間構造になっていて、それはどのように形成されたかという話の筋道ならば、第1章で挙げられた課題どおりに研究が進展することになるのだが、本書では、前提となる信仰圏の空間構造自体が明らかになっておらず、出発点から違っている。もう1つ付け加えれば、信仰圏の研究史に関する著者の理解は単純すぎるように思われる。信仰圏については、ここ数年は目立った研究がないが、松井の2003年の著作<sup>2)</sup>を見れば、同心円のような空間形状の議論ばかりではないことは明らかであろう。第1章で示されたもう1つの課題、すなわち地域の側から信仰を見る視点については、経済的・社会的背景との照合という方法論が繰り返されるだけで、知見と言うべきものは記されていない。

第二の項目は「時代的背景としての江戸時代」と題され、江戸時代の持つ意味が考察されるが、内容は非常に曖昧で、何が知見なのか評者には理解できなかった。明治時代以降と比べて議論すれば、江戸時代の特徴も見えてくるのであろうが、そのような書き方はされていない。たとえば、明治期以降、三峰山は神道化するし（寺院である観音院から、現在のように三峰神社となる）、近代化によるさまざまな社会的・経済的变化もある。そのような時代的变化によって、三峰信仰がどう変わったか分かれば面白いのだが、後述するように、明治期以降の変化は今後の課題になっているので、これらはないものねだりの願望である。ここでは、見出しとは別に、三峰講の組織形態についての知見がまとめられていると評者は考える。すなわち、三峰講は比較的平等な性格を有した代参講で地縁組織であるが、三峰山は相模大山や榛名山に比べて相対的に新しく、それが任意参加が多い点にあらわれているという。また、三峰信仰は村落的な性格と都市的な性格の両面を内包していたというが、何をもち「村落的」「都市的」とするのかというきちんとした議論は本書でなされていない。

第三の項目「信仰展開の地域的基盤」では、三峰信仰の展開と江戸地廻り経済圏の形成との関係を指摘する。とくに秩父と江戸の間に木材を通じた地域間交流があったことが、大滝村と江戸双方での信仰の展開に関連していたとする。これは、書名にもなっているように、本書で最も主張したい点であろう。これに対するコメントは後述する。

最後に、今後の課題が2点挙げられる。1つは明治期以降における三峰信仰の展開（性格変化）で、もう1点は、ある1つの町・村に視点を据えた他の信仰対象との比較である。さらに、日本の宗教における東西比較や、宗教と経済・社会との関連追究にも触れられる。

以上、章を追って、拙い紹介とコメントを綴ってきたが、全体的なことを述べておきたい。著者は、従来の信仰圏研究を批判し、信仰の展開を地域的基盤との関わりの中で見えることを繰り返し強調する。評者なりに整理すれば、「空間論」に対して、「地域論」からのアプローチを志向していると言えるかもしれない。では、「地域的基盤」とは何であろうか。本書には説明がなく、索引にも挙がっていない。分かりきった言葉のようであるが、本書で最も重要な概念であるからには、やはりいくらかの言及はなされるべきであろう。本書の文章から評者が想像するに、著者は、地域の経済・社会や地域間交流を念頭に置いているようである。第Ⅲ章から第Ⅵ章まで、常にこれらの事象が併記される（上述のように欠けている部分もあるが）。しかし、「地域」の構成要素がそれだけではないことは自明であり、最近の地理学では政治権力の影響が重視されることも多い。また、著者も時折触れるように、他の信仰も地域の構成要素である。地域の重層性も考慮されねばならない。地域の側から信仰を見るというのであれば、地域の全体像をどうとらえるのか、まず概念的におさえておくべきであろう。

次に、三峰信仰の展開を地域的基盤との関わりの中で検討して、結局、何が明らかになったのであろうか。第Ⅶ章の結論の知見では、江戸地廻り経済圏の形成と関係があると述べている。ところ

が、このことは最初の序論にすでに書いてあり、さらに言えば、高尾山に関する先行研究でも指摘されていることである。また、そうでなくとも、江戸地廻り経済圏と関係があると言われれば、一般論としてはそうかもしれないと思える単純な事柄である。冒頭に記した「パンチ力がない」という感想の原因の1つは、ここにもあるであろう。

もっとも、平凡な結論であっても、綿密な考証がそれを裏付けているのならば、そこに迫力があるはずである。ところが、上で何度かコメントしてきたように、本書では、信仰と経済・社会との関係を明確に示す直接的資料や具体的事例が提示されていない。資料を博搜している著者が出せないのだから、そういう資料はおそらくないのであろう。だからといって、同時代・同地域の事象を併記して、両者に関係があると言われても、説得力がない。一般論として言えば、信仰と経済・社会の間に関係はあるかもしれないし、地域論の立場からは同じ地域内の他の構成要素と関連付けたくなる気持ちはよく分かるのだが、日本でそのことを実証するのはむずかしく、成算があまり見込めないように思う。間接的な方法としては、三峰信仰が広まった地域と広まらなかった地域を比較して、どういう地域的条件が違ったから、片方は浸透し、もう一方は浸透しなかったという議論は可能である。しかし、この論法で江戸地廻り経済圏との関係を説明しきれるかどうかは別の問題である。

以上のように、著者の大きな結論は論証できているとは思えず、評者は今も納得がいかないままなのであるが、資料に基づいた小さな発見には、興味深く感じる事柄も多数あることを付け加えておく。

最後に文章技術的なことを付記する。拙評の最初に「文献や史料をよく調べてあるのだが、パンチ力がない」と述べた。パンチ力のなさは、明快さの欠如にも由来する。では、なぜ明快さが欠けているかということ、文献や史料の引用・紹介があまりにも多すぎて、話の筋が見えにくくなっているのである。とくに第Ⅰ章はその感が強い。もう

少し著者自身の文体で文章を組み立てて書いていただけると、主張が見えやすいのではないかと感じる。

例によって、評者の思うままに、辛口のコメントばかり付してきた。誤解やそれに基づく的外れな言も多々あるが、ご了解を乞う次第である。

## 注

- 1) たとえば、浜谷正人『日本村落の社会地理』古今書院、1988。
- 2) 松井圭介『日本の宗教空間』古今書院、2003。

(小田匡保：駒澤大学)

## 内田和子・寄藤 昂編著『地理学演習帳』

古今書院 2010年 ページ付なし 1,800円 (税別)

冒頭「本書のご使用にあたって」において、この本のねらいが次のように述べられている。「いずれの大学においても、高校時代に地理を履修した学生の数は少なく、教養の授業でいきなり地理学の専門的内容を講義するには難しい状況が多々みられる。そのような折に学生に対して、地理へのわかりやすい導入を行い、しかも作業を通して一種の成就感を味合わせたい」。このような執筆陣の思いは、今日の地理学に関わる先生方が共通して持っているのではないだろうか。

その執筆陣は、大学教員のほかに高専や高校、中学校の教員の12人から構成される。本書は大学教養科目としての地理の授業を想定されたワークブックであり、主題図やグラフの作成といった作業と、その成果の読み取りと考察を通じて、地理学的方法や見方を身につけさせようとするものである。

本書は6つの部からなり、25の課題が用意されている。各課題は、作業とそれに関する簡単な解説が見開きで1ページずつ配されている。基本的に、作業結果を提出させることが想定されており、作業に関するページには記名欄や切り離しのためのミシン目が付されている。また、これには模範解答が用意されておらず、本書が学生の自習よりも実習向けに設計されていることがわかる。

第1部「新旧地形図を比較して読む」は5つの

課題から構成される。課題1「農業用水の開発と農業的土地利用の変化を読む」(筆者 山野明男、以降、カッコ内の氏名は筆者名)では、常滑市の愛知用水建設前後の農業的土地利用の変化を読み取らせる。課題2「産業の発達と地形の改変を読む」(寄藤 昂)では、大垣市赤坂地区の地形断面図の作成を通じて、石灰・大理石産業の発展と地形改変との関係を考察させる。課題3「治水対策と地形の変化を読む」(寄藤 昂)では、長岡市の大河津分水路建設前後の海岸線の変化を読み取らせて、新しく形成された陸地面積を方眼法によって計測させる。課題4「ため池の改廃と保全を考える」(内田和子)では、明石市大久保町の土地利用変化について、ため池の減少とからめて読み取らせる。課題5「海岸の地形と高潮の関係を読む」(内田和子)では、玉野市の宇野港付近の土地利用や海岸線の変化を読み取らせ、高潮被害との関係を考察させる。

第2部「地形図から新たな図をつくる」には4つの課題が用意されている。課題6「水系図をつくる」(小橋拓司)では、紀伊山地白倉又谷の水系図を描かせて、そこから読み取らせた谷数と水系次数との関係をグラフの作成を通じて捉えさせる。課題7「断面図をつくる」(福本 紘・的場貴之)では、開聞岳の地形断面図の作成を通じて、地形と土地利用の関連を考察させる。課題8「標